

# 經濟學史上に於けるマルサスの地位

堀 經 夫

## 一 問題の所在

自由主義經濟學或は資本主義經濟學の成立事情については、從來様々な説明が試みられて居る。併し乍ら、今其の内容を主にして考へるならば、斯學は富とは何ぞやといふ問題の解決並びに需要供給の法則の發見に出發するものゝ如くである。かゝる解釋は一見奇異に感ぜられるかも知れないし、又決して完全な説明ではなからう。けれども、若し吾々がかの重商主義的經濟思想に反對して起つた自由主義的經濟思想の先驅者の書物を觀るならば、私のこの主張が必ずしも外的を外れてゐないことが分るであらう。私は此處でこのことを立證すべく詳しい説明を加へることは出来ない。たゞ、富に關するかのリチャード・カンティロンの定義——「富それ自體は生活の維持品・便利品・及び愉樂品であるに外ならない」<sup>1)</sup>——や、キリヤム・ベティ、ジョン・ロック、ダドリ・ノオス等の利子論や價值論——利率や價值は資金や財に對する需要供給の關係によつて定まるのであ

1) Richard Cantillon, *Essai sur la Nature du Commerce en Général*. 1755; Higgs's ed. 1931. p. 2.

るから、人爲を以てこれを規制することは不可である、との主張——を、ほんの一例として擧げて置くに止める。

さて富に關する正しき概念の樹立は、やがて經濟學の對象に關する正しき認識を意味し、又需要供給の法則の發見は、やがて富の運動或は流通の現象に關する最も一般的なる原理の理解を意味する。而して富に關するカンテイロンなどの定義は、その後アダム・スミスを経て今日に至るまで、殆んど著しい修正を受けることなしに（富を物質財のみに限るか、或はこれに非物質財を加へるか、については論争があつたけれども）傳はり來つて居るのであつて、吾々はこれに多くの言を費す必要を見ない。所が、需要供給の法則といふことになる、問題はそれほど簡單には片附けられない。蓋し、流通經濟或は貨幣經濟が行はれて居る限り、一般に財の價値或は特殊的に資本や土地や勞働の價値（即ち利子や地代や勞賃）がそれぞれの物の需要と供給との關係によつて定まる、といふことは眞理であるとしても、なほ經濟學者達は、更に一步を進めて、この需要や供給を左右する事情の研究に心を潛めざるを得なかつたからである。

かくて富の價値については、先づ單純なる需要供給の關係よりして其の表面の現象を説明せんとする試み<sup>(註)</sup>がなされ、然る後に其の本質を究めんとして主として財の供給或は生産の側の事情又は主として財の需要或は消費の側の事情を分析せんとする試みがなされたものと看做して、大過はなからうと思ふ。而して供給或は生産の側の事情を分析して價値論を樹てた最初の人<sup>(註)</sup>は、アダム・スミス（生産費説）やリカアドウ（勞働價値説）

であり、又需要或は消費の側の事情を分析して價值論を説いた最初の人は、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラス等（限界效用説）である。そこで問題となるのは、これから私が取扱はうとするマルサスである。彼は如何なる價值論を説いたのであらうか？ 彼れの價值論は學說史上如何なる地位を占むべきものであるか？

(註) キャナン教授は、ジョン・ロウ<sup>1)</sup>の需要供給説を a quantity-and-demand theory of value と呼んで居るが、かゝる命名法に倣へば、ジョン・ロックの需要供給説は之を a quantity-and-vent theory of value と、又ジョージ・バークリーの説は之を a plenty-and-demand theory of value と名づけることが許されるであらう。併しこれは彼等がそれぞれ使用して居る言葉の末に捉はれた場合の話であつて、彼等の言はんとせし所は、要するに、「賣買される總ての物は、買手が多いか賣手が多いかに比例して價格に於て騰落する、<sup>4)</sup>」といふ平凡な主張に歸着する。

## 二 マルサスの價值論を主題とする理由

併し私は、本論に入る前に、「經濟學史上に於けるマルサスの地位」を論ぜんとするに當つて、何故かくの如き一見微細なる問題に範圍を限定するか、について、若干の説明をして置かなければならない。これには次の二つの理由があるのである。

第一の理由は、一體人口論乃至人口原則そのものは經濟學の本來の對象なりや否やといふ點についての疑問である。言ふまでもなく、マルサスは彼れの人口論或は人口原則を以て有名である。そして實際多くの經濟學史の書物（筆者のそれをも含めて）に於て彼れの爲めに割かれる幾頁かの紙面は、彼れの人口原則の叙述・解

1) John Law

2) Cf. Edwin Cannan, A Review of Economic Theory. 1929. p. 159.

3) George Berkeley

4) John Locke の言葉

釋・批判等に充てられて居る。これを私は無意義とは思つてゐない。何故なれば、彼れの人口原則の裏には、人間の經濟生活——無論、自由主義的經濟組織の下に於ける——に關する法則（即ち經濟法則）の理解があるからである。たゞ稍々遺憾に感ぜられるのは、大部分の經濟學史の書物は、この點を無視し或は少くとも輕視して、全力或は主力をマルサスの人口法則そのものゝ叙述なり解釋なり批判なりに注いで居ることである。吾々が經濟學史の書物——マルサスの人口論や一般の人口論史を取扱つた書物のことを言つて居るのではない——を繙く際に、スミスとリカードウとの經濟理論の中間にマルサスの人口理論が介在して居るのを見出して、多少とも奇異の念——何か夾雜物が在るといつた感じ——を懷くことが若しあるとするならば、それは恐らく人口論者としてのマルサスを一個の經濟學者として描き出すに不十分なものが、其の中にあるからであらう。經濟學史の専門書にして既に然り、況んや一般常識に於てをや、である。無論、かく言ふことによつて、私は純粹な人口論者としてのマルサスの燦然たる地位に疑を挾まうといふのでは毛頭ない。たゞ、經濟學史の上でマルサスを取扱はんとする場合には、今少し經濟學者としての彼れの特徴を示すことに努むべきではなからうか、といふまでである。

少し極端な言ひ表はし方かも知れないが、マルサスは人口論者から經濟學者に成つた人ではなくて、寧ろ最初より經濟學に興味を有ち其の特殊研究（具體的に言へば、貧乏・食物或は生活資料・其の價格・地代などの研究）より其の一般的研究（經濟原理一般の研究）に這入つた人である。而も彼は一つの經濟法則——或は寧

る、一つの經濟學的考へ方、といった方が良からう——に終始一貫してゐたのである。(これは即ち需要と供給との關係から諸々の現象を眺めるといふ考へ方を指すのであるが、其の詳細は拙論を進めるにつれて漸次明らかとなるであらう。) 故に吾々がマルサスを研究し彼れの經濟學史上の地位を論ずる場合に、彼れの經濟法則の一つの表現にすぎない所の人口原則のみを取扱ふことは、啻に不十分なるのみならず、亦經濟學者としての彼を正當に評價する所以ではないのである。私はこの文章の冒頭に、「一體人口論乃至人口原則そのものは經濟學の本來の對象なりや否や」との疑問を出して置いた。而して私は必ずしも眞正面からこの疑問に解答を與へなかつた。併し拙稿に於て私がマルサスの人口論そのものではなくて彼れの價值論——それは人口論よりも一層深く且つ廣く彼れの經濟學史上の地位を示すものである——を主題としようとする一つの理由は、略ぼ明かになつたと思ふ。

私が「經濟學史上に於けるマルサスの地位」を論ぜんとするに當つて、彼れの價值論或は需要供給説の學說史上の意義を主題とすることの第一の理由は、頃日この點を問題として經濟學史上——人口論史上ではない——に於けるマルサスの功績を積極的に認めんとする試み、即ちマルサス復興又は復活(rehabilitation of Malthus or renaissance of Malthusian Economics)の聲が、經濟學界に起りつゝあることである。寡聞なる私が最近見た範圍に於ても、かのケインズの「傳記の研究」<sup>1)</sup>の中に收められた論文「ロバート・マルサス。ケンブリヂ出身の最初の經濟學者」<sup>2)</sup>や、マクラクンの「價值論と景氣循環」<sup>3)</sup>は、其の代表的なものである。かゝる機運

- 1) J. M. Keynes, Essays in Biography. 1933.
- 2) "Robert Malthus: The First of the Cambridge Economists."
- 3) H. L. McCracken, Value Theory and Business Cycles. 1933.

に際會せる今日、私がマルサスの經濟理論就中其の根本となれる價值理論の特徴を問題とすることは、必ずしも無意味ではないであらう。率直にいふならば、私は從來マルサスの價值論を割合に輕視してゐた。従つてこれが彼れの學史上の地位を支配するとは考へてゐなかつた。然るに、過日マルサスの一八〇〇年の小冊子「食料品の現在の高き價格の原因に関する研究」<sup>1)</sup>を入手し、又マルサスに関する前記の兩著書を併讀することによつて、私は從來の解釋を大いに改訂せざるを得なくなつた。私がマルサスの地位を見直さうとする他の理由は、實に茲に在るのである。

なほ一寸附言して置き度いのは、本稿に於て私は、マルサスの經濟理論一般とか、或はマルサス對リカアドウの價值論争とかを、詳細に論述する積りはない、といふことである。これ等の主題については、他の諸賢の獨立の論稿が別に輯められて居る。私はたゞ經濟學史上に於けるマルサスの地位を明かにするといふ目的を以て、彼れの價值論の特徴を浮出させようと努めるのみである。

### 三 「人口論」に於ける需要供給説

マルサスには價值に關して決定論と尺度論とがある。價值決定論は、「人口論」第一版以來終始一貫彼れの頭の中にあつたものであつて、所謂需要供給説に屬する。價值尺度論は、リカアドウとの交際が始まつてより<sup>2)</sup>後、殊にリカアドウの「經濟原論」(一八一七年)を讀んでより後に、彼との論争の間に展開されたものであつて、

1) An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions. 1800.

2) ホナア博士はマルサスとリカアドウとの交友は1810年二月から始まつたとして居るが、スラファ (Piero Sraffa) の最近の研究によれば、それは1811年六月からとのことである。Cf. Keynes, *op. cit.* p. 134. foot-note.

結局に於て普通に支配労働價值説と呼ばれて居るものに歸著した。併し今此處で問題となるのは、價值決定論としての需要供給説のみである。

言ふまでもなく、「人口論」そのものは諸貨物の價值の高低を論じたものではない。それは要するに、「貧の性質及び原因に關する研究」であり又貧乏必然論の主張である。併し彼れの立論の根柢には需要と供給との關係を通して社會の現象を觀るといふ考へ方がある。即ち「人口論」に於ては、食物或は生活資料に關して其の供給（土地の生産力）と其の需要（人口の増加力）との比較對照が試みられて居るのである。彼は「人口論」第一版に於て次の如く言つて居る。

「人口の増加力と土地の生産力とのこの自然的不平等と、これ等の力の結果を恒に平等に保たなければならぬといふ吾々の天性關する大法則とは、社會完成の途上に横はる大難關であつて、それは私には到底打克つべからざるものと見える。これに比べれば、他の總ての議論は瑣々たる從屬的の重要さをしか有たない。總ての生物界に行き互つて居るこの法則の重壓から、人間が逃れ得る途あるを知らない。如何なる空想的平等も、如何なる農業上の規制の極度の實行も、たゞの一世紀間すらもこの法則の壓迫を除去することは出来ない。それ故に、それは、社會の全員が、安樂・幸福・且つ比較的有閑に生活し、而して彼等自身及び家族に生存の手段を供給することについて、何等の心配をも感じないやうな、かゝる社會の存立が可能であるとの考を、決定的に否認するものゝやうに思はれる。」<sup>1)</sup>

1) Malthus, An Essay on the Principle of Population. 1st ed. pp. 16—17.

需要供給或は需要供給均衡の思想が如何にマルサスを支配して居たかは、この一例によつても明かであらう。而して彼は、「人口論」の中に於て、この思想に基いて議論を展開して行くに當り、時々食物或は生活資料の價値又は價格にも言及しなければならなかつた。何故なれば、食物或は生活資料の需要と供給との相對的狀態を直接に又現實に推知し得るのは、これ等の物の現實の價格を通じてあるから。尤も「人口論」は、人口法則（原因）と事實としての貧（結果<sup>註</sup>）とを叙述するのが、其の主たる目的であつたから、其の中には原因から結果が生じて來るその過程——それにあつては價格が當然問題となる——の説明は餘りない。併しそれでもこれが全くないわけではないのであつて、この點については我國に於て吉田教授の詳細なる研究がある<sup>1)</sup>。

（註） 私はこゝで貧といふ文字を使用したか、マルサスにあつては「害惡」(evil)といふ文字になつて居るのであり、而してこの言葉の中には、「罪惡」(vice)・「困窮」(misery)・及び「道德的抑制」(moral restraint)——但しこの最後の項は「人口論」第二版以降——が含まれて居ると見てゐてあらう。

由つて私は「人口論」よりの引例を止めて、マルサスが専ら食料品の價格を研究すべく一八〇〇年に公けにした小冊子（前掲）に於ける彼れの需要供給説を直ちに紹介することとする。

#### 四 限界購買力説

この小冊子は、マルサス自身の語る所によれば<sup>2)</sup>、一八〇〇年の終りに旅行の途次馬上にて思ひ付き二日ばかり

1) 吉田秀夫著・經濟學說研究、二八二——二九一頁參照

2) Cf. Economic Journal. June, 1897. pp. 270—271.



りの間に書き上げたものであるとのことであるが、其の全表題は、

An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions: containing an illustration of the nature and limits of fair price in time of scarcity; and its application to the particular circumstances of this country. By the Author of the Essay on the Principle of Population. 1800. (「食料品の現在の高き價格の原因に關する研究。缺乏期に於ける公正價格の性質及び限度の説明、並びにこの國の特殊事情への其の適用を含む。」)

といふのである。其の冒頭に、「食料品の現在の高き價格の原因として從來舉示された多くのものの中に、一つ主要な原因が未だ發見されないでゐるやうに、私には強く思はれるのである。少くとも、文字又は言葉を以てなされる所の、この主題に關する論議の中に於て、私の考では生活の必需品の價格を高めるのに最も強く作用したと思はれる原因が、未だ全く暗示されてゐないやうである、<sup>1)</sup>」といふ章句がある。然らばこの主要な原因とは何か？ それは後年リカアドウによつて主張されたやうに通貨(不換紙幣)の増發を意味するのではな<sup>2)</sup>い。又單なる供給過少若しくは生産費増加を意味するものでもない。それは實に供給に比較されたる需要の烈度を指すのである。即ちマルサスは、アダム・スミスの所謂自然價格を説明したる後に、併し「或る貨物が缺乏して居る場合には、其の自然價格は必然的に忘れられ、其の實際價格は供給に對する需要の超過によつて左右されるのである、<sup>2)</sup>」と述べて居る。これは明かに價值に關する生産費説を輕視して需要供給説を主張せるもの

1) An Investigation. p. 1.

2) Ibid. p. 5. 圖點新附

である。而も彼れの需要供給説は、供給については或る時點に於て提供されたる貨物の分量のみを考へ、需要については需要者の購買力を考へんとするものである。故にそれは需要供給説といつても需要の方に重點を置かうとするものである。

(註) マルサスは通貨の分量と食料品の高價との關係について次の如く述べてゐる。即ち、「昨年中に流通紙幣が著しく増加したとするならば、それは食料品の高き價格の原因ではなくて寧ろ其の結果である、私は考へ度い。但しこの流通媒介物が多量にあることは、食料品が廉價に復歸することを妨げる一つの原因ではあらう。」<sup>1)</sup>

この點についての彼れの解説を更に聽かう。彼はいふ、

『今假りに五十名によつて非常に要求されて居る一貨物が、或る生産上の缺陷によつて、四十名に供給するに十分なる分量しかないとしよう。若し頭から四十人目の人がこの貨物の購入に充て得る二志を有ち、他の三十九名はそれと違つてはゐるが二志以上を、又四十一人目以下十名の人は二志以下を有つて居るとするならば、この品物の實際の價格は、取引上の純粹な原則に従つて、二志に定まるであらう。若しもそれ以上が要求されるならば、この品物の購入に二志といふ金額を支出し得る人は四十名にすぎないから、全貨物を賣捌くことは出来ないであらう。又二志で全貨物を賣捌くことが出来るのであるから、二志以下が要求される理由は全くない。』<sup>2)</sup>

この説明の中に於ては、供給過少のことは前提とされてゐるが、併し生産費のことには毫も言及されてゐな

1) Ibid. pp. 24—25.

2) Ibid. pp. 5—6.

い。この前提の上に立つ限り、価格の決定を左右するものは専ら限界需要者の購買力であるとされて居る。

かくて前の例についていへば、その貨物が二割だけ缺乏して居る場合の「公正價格」(この小冊子の表題中にある文字)は二志なのであるが、併しマルサスはこの小冊子に於てこの「公正價格」を説明することを以て終つて居るのではない。何故なれば、この小冊子の主たる目的は、實に、當時の英國に於ける食料品の價格がこの「公正價格」以上に騰つて居る事實、及び其の特殊原因を説明するにあつたのであるから。彼は先づ瑞典に比べて英國に於て食料品の價格が特に高い事實を指摘して曰く、

「一七九九年の夏に、北歐旅行の途中、私は瑞典を通過した。その當時、前年の長い旱魃のために、全國に亘つて穀物の一般的缺乏があつた。諾威に近いウルムランド地方では、殆ど飢饉に近い状態を呈し、下層階級の人々は最も烈しい困窮に陥つてゐた。……この時瑞典のこの地方に於ける缺乏の程度は、疑もなく、吾々が英國に於てこれまで経験した如何なる缺乏よりも、著しく烈しいものであつた。而も吾々の知り得た限りに於ては、パンの主原料穀物たるライ麥の價格は其の通常平均額の二倍以上には騰つてゐなかつた。然るに去年この國(英國——堀註)に於ては、程度に於て瑞典のそれよりも遙かに劣つてゐたと認めざるを得ない缺乏に際し、小麥は其の以前の價格の三倍以上に騰貴したのである。」<sup>1)</sup>

然らば、かくの如く英國の食料品をして缺乏期に於ける「公正價格」以上に騰貴せしめた原因は何であるか? マルサスによれば、それは、實に、英國の貧民の購買力を人爲的に増大せしむる所のかの救貧法——或

1) Ibid. pp. 2—3.

は寧ろ、かの「スビイナムランド法」<sup>1)</sup>——である、といふのである。曰く、

「この王國の大多數の場所に於て、穀物の價格に應じて教區の給與を増加せんとする試みがなされて居るが、この試みとこれをこの程度まで行ふことを可能ならしめた所のこの國の富とこそは、比較的につて、

この國の食料品の價格をして、現在の缺乏の程度から考へて當然の高さと思はれるもの（公正價格——堀註）以上に、換言すれば、かゝる原因（救貧——堀註）が作用してゐない或る他の國に於けるよりもより以上に、昂騰せしめた唯一の原因であると、私は最も強く考へ度い。<sup>2)</sup>」

なほ彼は、この「唯一の原因」といふ文字に註を附して、「私は今實際の缺乏を齎らしたであらう所の諸原因について語つて居るのではなくて、この缺乏の實際の程度に比して食料品の甚だ高き價格の原因について語つて居るのであるといふことを、注意して置き度い、」と述べて居る。

そこで彼は、前に掲げた假設例（或る貨物の缺乏時に於ける公正價格が二志に定まるべきことを證明した例）に引續き、例へば救貧法によつて貧民に一志づゝが給與された場合に、その貨物の價格が缺乏時に於ける公正價格以上に騰るべきことを論證して曰く、

「却説吾々は、この場合誰かゞ十名の貧民——彼等はこの貨物の消費から除外されて居つた人々である——の一人づゝに一志を與へるものと假定しよう。さうすれば今や五十名全部が、以前の價格たる二志を提供することが出来るやうになる。公正なる取引の各原則に従へば、この貨物は直ちに騰貴しなければならぬ。

1) "Speenhamland Act of Parliament."

2) Investigation. pp. 4—5.

若しも騰貴しないならば、總て二志を提供することが出来る五十名の中から、如何なる方法で十名だけを除外しようといふのか？ 蓋し假定によれば依然として四十名に足るだけしか貨物はないのであるから。貧しき者の二志も富める者の二志と正に同じ效力をもつて居る。若しも吾々が最も貧しい十名——それが誰であつてもい——の手の届かないやうにこの貨物が騰貴することを妨げるべく干渉を加へようとするならば、吾々は誰々を消費より除外するかについて賭をしたり、籤を引いたり、富講を行つたり、或は喧嘩をしたりしなければならぬであらう。私は此處で、一國の諸貨物の分配のために、これ等の方法の中の孰れかゞ、貨幣による下劣な差別よりも一層適當して居るかどうか、といふやうな問題を取扱はうとは思はない。たゞ總ての文明開化國の慣習並びに商取引の各認められた原則に従へば、価格は確かに五十名中十名だけが購ひ得ない點にまで騰貴することを許されなければならない。この點は多分二志半又はそれ以上であつて、それが新たにこの貨物の價格となるのである。除外された十名にそれ／＼もう一志づゝを與へるとするならば、今や總ての人が二志半を提供することが出来るであらう。其の結果として價格は直ちに三志又はそれ以上に騰貴する筈である。かくて價格はその都度騰るに違ひない<sup>1)</sup>。」

この小冊子は二十八頁に亘るものであり、其の中にはなほ多くの論述がなされて居るけれども、併し彼れの主張せんとする事柄の根柢をなすものは以上の價格に關する限界購買力説に外ならない。ケインズはマルサスのこの説明を引用したる後に、「言葉及び考へは單純である。併し此處に體系的經濟思想の端緒がある。この

1) Ibid. pp. 6—7.

小冊子の中にはなほ多くの引用に値する章句がある。否其の殆ど全部が引用に値するであらう。この「研究」はマルサスの書いたものゝ中で最善のものゝ一つである、云々<sup>1)</sup>と述べて居るが、これは決して過褒の言ではない。

マルサスはこの小冊子の終りに、近年の食料品の價格騰貴及び其の結果たる貧民の困窮は、自分が二年前前に出版した「人口論」の中で説明しようと努めた原則の最も良い適例である、といふ意味のことを述べて居るが、これは尤もの言である。たゞ吾々の注意しなければならないのは、前にも一寸書いて置いたやうに、原因たる人口法則と結果たる貧とを叙述するのが「人口論」の主たる目的であつたのに對して、この小冊子ではこの原因よりこの結果が生れるその過程即ち食料品の高價の原因を究明するのが目的であつた、といふ差異の存することである。

## 五 購買意思説

其後マルサスは、一方に「人口論」に改訂を加へつゝ、他方に救貧法に關する論文<sup>3)</sup>や穀物條例及び地代に關する三種の小冊子<sup>4)</sup>を出版した。併しこれ等のものゝ中に於ける價值論は、より複雑になり且つより曖昧になつたのみであつて、嚮きの小冊子に於けるが如き勁銳さを失つてゐる。加之、所謂地代論争<sup>5)</sup>期に現はれた彼れの書物の中の價值論について、私は曾つて紹介の論文を書いたことがあるから、彼れ

1) Keynes, *op. cit.* pp. 125—126.

2) Cf. Investigation. p. 27.

3) A Letter to Samuel Whitbread, on his Proposed Bill for the Amendment of the Poor Laws. 1807.

4) Observations on the Effects of the Corn Laws. 1814; The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn. 1815; An Inquiry into the Nature and Progress of Rent. 1815.

5) 大阪商科大学經濟研究年報・第一號所載、拙稿「マルサスとリカアドウとの地代論争」參照

の學史上の特徴を明かにせんとする本稿に於ては、これに觸れないこととする。

そこで私はこれからリカードとの價值論争（但し價值尺度に關するものを除外する）に現はれたマルサスの價值論を略説しようと思ふのであるが、彼れの所論を知るために必要なるリカード宛の書簡が出版さるべくして未だ出版されてゐないから、目下の處吾々は今まで部分的に公表された彼れの數通の書簡やリカードウの書簡を資料とする外はない。

さてマルサスが價格の決定を論ずるに當つて如何に需要者側の事情を重要視したかは、既に明かであらう。

而して彼はこのことを強調するために、終に「有效需要」(effective demand)なる言葉——これは既にアダム・スミスが使つた言葉である——に依據することとした。彼がこの言葉を何時頃から使ひ始めたかについては、彼れの書簡が未だ全部公刊されてゐない今日、之を確言することは出来ないが、これまで發表された書簡の中では、一八一四年十月九日附のリカード宛の書簡に於けるものが、最も古いやうである。其の中で曰く、

「資本の利潤……は、生産物の價格から生産出費を差引いたものに正確に等しい、といひ得るであらう。従つて生産物の價格が生産の價格（生産出費のこと——堀註）より先んじて居る場合には、資本の利潤は常に騰貴しなければならない。而して過去二十年間に於ける土地については、疑もなくこのことが事實であつた。利潤を決定するのは生産出費に比較された生産物の分量ではなくて（所が貴君はさうだと主張せられて居ると私は思ふ）、實は貨幣的生產出費に比較されたその生産物の交換價值又は貨幣價格なのである。而して生

1) 前掲の P. Straffa によつて近く出版さるべき「リカード全集」(Works of David Ricardo) の中にマルサスの書簡が附録される豫定になつて居ることである。

産物の交換價値は勿論必ずしも其の分量に比例するとは限らない。例へば肥沃な土地を有する貧國に於ては、貴君の説に従へば資本の利潤は高かるべき筈であるけれども、實際には概してそれほど高くはない。又中位の土地を有し商業の旺んな富國に於て、利潤は屢々遙かに高いのである。高利潤の原因を述べるに當つて、貴君は十分に生産物の價格に注意せずして殆ど専ら生産出費のことのみを考慮して、人間の欲望や嗜好が價格——従つて資本を有利に使用する手段——に影響することを、甚しく無視して居られるやうに、私には思はれる。私はお尋ねし度い、貿易商人をして其の輸入する茶・砂糖・及び煙草を、彼がそれ等と引換へに輸出した製造品よりもより、高い價格で賣ることを得せしむるものは何であるか、と。外でもない、それはこれ等の品物が社會の欲望と嗜好とにより、良く適するが故である。これ等の物を買ふ力がより大なるではなくて、買ふ意思がより大なるのである。かくてこれ等の貨物からこの國が引出す富及び其の輸入のために資本を有利に使用する手段の究極の原因は、それ等の物に對して嗜好が存在して居るといふことである。私の意見では、ミル氏（ジェイムズ・ミルのこと——堀註）の誤謬の源は、人類の欲望と嗜好とに對比せしめられた貨物の分量を考慮せずして、單に諸貨物の分量を相互に對比して考へることに、發して居るものゝ如くである。又私は、「蓄積の欲望は消費の欲望と正に同じ有效さを以て、需要を惹起すであらう」とか、「消費と蓄積とは同等に需要を進めるであらう」とかいふ貴君の論述には、どうしても賛成出来ない。私は敢ていふ、利潤の下落——それが一般に蓄積の結果起るものであることは、貴君も認められるであらうと信ずるが



——の原因は、生産物の價格が生産出費に比較して下落するといふこと、別言すれば、有效需要が減少するといふこと以外にこれあるを知らない、と。有效需要といふ言葉を、私はこの意味に理解して居る。而してこれはアダム・スミスによつて與へられた解釋と一致すると思ふ。<sup>1)</sup>」

私は讀者を退屈させるやうな長い引用を試みた。併しこれによつて、リカードウとの論争の初期に於て、マルサスが、利潤を以て貨物の貨幣價格より貨幣的生産出費を差引いた殘額であるとなし、而してこの貨幣價格は人々の欲望と嗜好とに専ら依存すると説き、更に進んでこの欲望と嗜好との烈度を有效需要と名づけたことなどが、これによつて明瞭となつたとすれば、この引用も無駄ではなからう。

かくてマルサスが、或る貨物の供給量——生産されて存在する分量——を與へられたものとなし、其の價格は需要者側の事情如何によつて左右される外はない（生産出費は利潤の大小又は増減を考へる場合にのみ問題となる）と主張したる點は、以前の「食料品高價の原因の研究」に於けると同様であるが、ただ吾々は、彼が以前には需要者側の實際の購買力（即ち限界購買力）を問題となしたるに反し、此度はこの購買力を度外視して寧ろ購買意思を重視して居る（右の引用中、「これ等の物を買ふ力がより大なるのではなくて、買ふ意思がより大なるのである、」といふ章句を想起せよ）、といふ差異を看破しなければならぬ。併し惟ふに、この力と意思とは異つた概念であるには違ひないけれども、而も或る人の需要をして有效ならしめるためにはこれ等が共に存在して居ることを必要條件とする。力あつて意思なく又意思あつて力なくば、需要は無きに等しいであら

1) Economic Journal. June, 1907. pp. 274—275.

う。故にマルサスと雖も、前の小冊子に於ては裏に購買意思を認め、又後の書簡に於ては暗に購買力を認めてゐたに違ひない。

然らば彼はこの購買力と購買意思との結合を公然と試みなかつたか？ 否、然うではない。私は、このことを示すべく、直ちに彼れの「經濟原論」に於ける價值論の特徴の説明に移るであらう。

## 六 兩説の結合

併し乍ら、幸にして私はこの點について細叙をなす必要を免れることが出来る。何故なれば、これに關する研究は既に我國に於ても多少發表されて居るのであるから<sup>1)</sup>。但しマルサスは「經濟原論」に於て彼れの價值論を纏め且つこれが應用を取扱つて居るのであるから、今これに全く觸れないわけには行かない。彼は先づ一般に需要供給法則の重要性を叙して曰く、

「需要及び供給といふ言葉は各讀者の耳に甚だ親しく、且つ個々の場合に於ける其の適用は十分に理解されて居るから、私はこれまでこの言葉を時折使用した場合にも、態々それに説明や定義を加へて推理の進行を妨げることを必要と考へなかつた。併し乍ら、これ等の言葉は、絶えず用ひられては居るけれども、決して正確に適用されてはゐないのである。……經濟學に於ける總ての原則の中、需要供給の原則のやうに廣汎な勢力範圍を有つものは他にない。……交換價值は一貨物を他の貨物と交換せんとする力及び意思に依存す

1) 吉田秀夫著・前掲書、二九一——三一〇頁、拙著「リカアドウの價值論及び其の批判史」二六二——二六九頁など参照

る。而して一般的價值尺度及び交換媒介物（貨幣——堀註）が採用されることによつて、社會が（通俗の言葉でいへば）買手と賣手とに分割される時には、需要は購買力と結び付いた意思と定義され得べく、又供給は賣却の意圖と結び付いた貨物の生産と定義され得るであらう。この状態の下に於ては、貨幣で示された貨物の相對價值、即ち其の價格は、供給に比較されたる相對的需要によつて決定される。この法則は非常に一般的であるから、價格變化が一つでもあれば、其の原因を探つて需要又は供給に影響する或る變化が前以て起つて居るといふ事實に之を求めることが、必ず出来るのである。……價格が需要と供給とによつて決定されるといふ場合、それは價格が需要のみ又は供給のみによつて決定されるといふ意味ではなくて、これ等兩者の相互關係によつて決定されるといふ意味である<sup>1)</sup>。

これまではまだ平凡な説明である。併し、これに引續いて需要と供給との意義を更に限定する段になると、彼はその需要供給説に一つの特色を與へて居る。即ちそれによれば、需要とか供給とかいふ言葉を「需要の實際の範圍」とか「供給の實際の範圍」<sup>2)</sup>とかの意味に解釋するならば、或る時點に於ては需要と供給とは必ず相等しいわけである。即ち、「供給が非常に小であれば、有效需要の範圍はそれよりもより大ではあり得ないし、又供給が非常に大であれば、需要或は消費の範圍がそれに比例して増加するか、或は供給の一部分が無用となつて生産されなくなるか、其の孰れかである。」<sup>3)</sup> それ故にこの意味に於ける需要と供給との比例の變化は價格には毫も影響を及ぼし得ない。そこで或る貨物の價格決定を論ずる場合には、先づその貨物の供給量又は生産

- 1) Malthus, Principles of Political Economy. 1820. pp. 64—65.
- 2) the actual *extent* of the demand, the actual *extent* of the supply
- 3) Ibid. p. 65.

量を前提とし、然る後に「購買者の意思及び力、即ち彼等の需要の烈度」を考へなければならぬのである。尤もこの意思と力とは、獨占貨物以外の貨物については其の生産出費と無關係ではないのであるが、併しその貨物の價格騰落は決して生産出費の増減によるものではない。故に、例へば、「労働のみによつて生産される一定量の貨物を得るために、より多くの勞力を要することとなり、其の獲得が一層困難になつたとするならば、吾々はかゝるより、大なる勞力の施行を以て、需要烈度の増加、或はそれを取得するために、より大なる犠牲を提せんとする力及び意思、の證據と看做すことが出来るであらう。」<sup>1)</sup> 即ち、生産出費の増加は價格騰貴の原因ではなくて、需要の烈度（従つて價格）が増加したことの結果（或は證據）なのである。もう一度言ひ換へれば、或る貨物の生産出費の増加は、以前よりもより、大なる犠牲を提供することが出来且つ喜んで提供しようとして居る人々に供給するに足るだけの分量のみが生産され得ることを、意味して居るのである。<sup>2)</sup>

私は最早これ以上マルサスの「經濟原論」よりの引用を附加することを必要としない。彼れの議論の立て方は既に明瞭である。即ち、これまでの論著や書簡に於て、價格の決定に關し、或は需要者の購買力を或は其の購買意思を別々に強調したるマルサスは、今や「經濟原論」に於て、この力とこの意思とを明瞭に併合し、これ等兩者を以て需要なる概念の内容となしたのである。

## 七 結 論

1) Ibid. p. 66.

2) Cf. ibid. pp. 67—68.

以上私は簡單ながら「人口論」より「經濟原論」に至るまでのマルサスの價格論（價值論といふも同じ）の特徴並びに變遷を辿つて來た。私は本稿の初めに、經濟學史の上に於ては、「富の價值については、先づ單純なる需要供給の關係よりして其の表面の現象を説明せんとする試みがなされ、然る後に其の本質を究めんとして主として財の供給或は生産の側の事情又は主として財の需要或は消費の側の事情を分析せんとする試みがなされた、」と述べ、然らばマルサスの價值論は如何なる地位を占むべきものであるか、との問題を提出して置いた。今やこの問題に答へなければならぬ。私は次の數項に分けてこれを試みるであらう。

第一、マルサスの價值論は、表面上は需要供給説であるが、併しそれは彼以前の學者のそのやうに單なる常識的需要供給説ではない。

第二、マルサスの價值論は、財の供給或は生産の側の事情を分析究明して價值の本質を解かうとするものではない。このことこそ彼れの價值論をしてリカアドウのそれと全く相容れしめなかつた根本原因である。リカアドウは供給側の事情（主として投下労働量の多少）に重きを置き、供給があれば需要は當然それに追隨するものと考へた。之に反してマルサスは需要が價格を支配し價格が供給を左右するものと看做した。然らばこれ等の相反する考へ方の中孰れか一方が誤つて居るのであらうか？ 否、これ等は共に許さるべき考へ方である。たゞリカアドウの方は價值の永續的或は多年的傾向を理解せんとしたるもの、又マルサスの方は價值の一时的或は短期的傾向を説明せんとしたるものである。<sup>1)</sup>(註)

1) Cf. Letters of Ricardo to Malthus, edited by J. Bonar. 1887. p. 127.

(註) この點については、前記マクラクンの著「價值論と景氣循環」(一九三三年)に詳しく論ぜられて居る。この書物の各項の内容については随分出鱗目と思はれる個所を指摘し得るけれども、全篇を通ずる著想には大いに觀るべきものがある。

第三、マルサスの價值論は、財の需要又は消費の側の事情に重きを置かんとするものである。併しそれは所謂主觀學派の如く購買意思の決定を限界效用の理によつて根據づけんとするものではない。マルサスには欲望と嗜好との烈度といふやうな言葉はあるけれども、併し彼はこの烈度を更に心理學的或は生理學的に掘り下げて解説しようとはしなかつた。故にマクラクンのやうに、マルサスの價值論はオウスタリ學派によつて發展せしめられた限界效用説の先驅をなすものである、といふのは、<sup>1)</sup>或る意味に於ては正しいが、少し言ひ過ぎのやうでもある。寧ろ簡單に限界購買力説と名づけた方がより適切であらう。

之を要するに、マルサスの價值論は主觀説により、接近して居るが而もこれと同一ではない、といふ結論を得たのである。

マルサスの經濟學史上の地位を論ずるについては、人口論を除外するとするも、なほ述べべき事柄が残つて居る。例へば彼れの恐慌論乃至景氣循環論の如き之である。併しこれについては既に多くの解説書が刊行されて居る。加之、この議論の根柢には右に述べたやうな價值論が横はつて居るのである。故に私は、彼れの學説の根本的特徴を説明せし上は、其の適用論たる諸々の學説にまで及ばないであらう。ケインズはマルサスを賞揚して、「二百年の間マルサス流の考へ方が殆ど全く抹殺されてリカアドウのそれが完全に支配力を保つて來

1) Cf. McCracken, *op. cit.* p. 135. and p. 14.

たといふことは、經濟學の進歩にとつて災難であつた、<sup>1)</sup>といひ、又マクラクンは、「生産力の増加並びに需要拔きの供給のみを考へるといふリカアドウ流のやり方に、理論並びに實際がかくも廣く追隨して來たことは、少しばかり不幸であつた。リカアドウ流經濟學は、實際長期間の進行を良く説明したけれども、併しこの進行の途上には、この種の經濟學の説明し得ない所の、不安定・恐慌頻發・及び周期的景氣循環があつたのである。この不安定が第二十世紀の重大なる經濟問題となつた限りに於て、今や有效需要や比例の法則を強調する所のマルサス流經濟學の復活の時機が熟して居る、<sup>2)</sup>」といつて居る。私の淺學を以てかゝる最近の學界の叫びを判定することは出來ない。たゞ、私自身は從來マルサスの經濟理論就中價值理論を餘りにも輕視してゐたことの罪を地下の彼に謝し、死後百年目に彼れの經濟學復興の聲が英米兩國に起りつゝあることを告げて、彼を記念する一つのよすがとし度いと思ふ。

1) Keynes, *op. cit.* p. 141.

2) McCracken, *op. cit.* p. 136.

